

認知症について

竹丘病院 院長 宮崎徳藏

はじめに

2007年の簡易生命表に基づく日本人の平均寿命は、男性79・19歳、女性85・99歳であり、超高齢化社会が現実のものになっていきます。80歳を越えて元気に過ごされている高齢者も増えていきます。一方、65歳以上の10人に1人、85歳以上の4人に1人が認知障害を伴うといわれています。

厚生労働省の推計で、認知症患者は2005年に250万人、2025年には約300万人と推定されています。認知症は一度獲得された記憶力や判断力などの知的機能が低下し、日常生活に支障をきたす病気です。

◆こんなことに気がつきませんか

すこし前に聞いた事を忘れる。電話の取次ぎができない。同じ事を何度も言ったり、聞いたりする。自分でしまい込んで忘れてしまい、他の人に盗られたと言う。以前に比べて身だしなみや世の中に対して無関心になる。おかしな言動がみられるときには、認知症が疑われます。

認知症の原因には、アルツハイマー型認知症、脳血管性認知症、うつ病、慢性硬膜下血腫、正常圧水頭症、甲状腺機能低下

けが必要になり、人格が崩壊し、尿失禁、便失禁、言葉が失われて寝たきり状態になります。

●治療はどうするのか

日本では、アリセプト(塩酸ドネペジル)が承認されています。病気の進行を遅らせるとされています。そのほか、適切なりハビリテーションとしてスピリチュアル回想法、運動療法、音楽療法、絵画療法、アロマセラピーなどが行われています。

●どこを注意すればよいのか

病気の始まりは、老化に伴う物忘れとの区別は困難です。そこで症状の経過をみるのが大切です。老化に伴うものは、日常生活や社会生活などに支障をきたすことはありません。

しかし、認知症では、何度も同じことを聞く。ものの名前がでてこない。ものの置き忘れが目立つ。時間や場所が不確かになる。薬の管理ができなくなる。ただし、本人は自覚がありません。

とくに家庭生活を送る主婦や高齢者では、異常に気づくのが遅れることがあります。早く異常に気づくには、家族や周囲の人の注意と観察が大切です。

◆脳血管性認知症

●どのような病気が

脳の血管が詰まって起こる脳梗塞、血管が破れて出血を起こす脳出血が原因で、血液の流れが悪くなり、その先に行かなくなり、神経細胞が障害された結果、手足が動かない、言葉が話せないなどの症状がみられます。障害された部分では脳の働き

症、脳腫瘍、薬物やアルコールによる中毒などがあります。治療により治るものもありますので正確な鑑別診断が必要です。本稿では高齢者に多くみられるアルツハイマー型認知症と脳血管性認知症について述べます。

◆アルツハイマー型認知症

●どのような病気が

原因は不明ですが、何らかの理由により脳内の情報を伝達する神経細胞がゆっくりと変性して死に至り、正常な脳の機能が障害される病気です。診断には形態画像が得られる頭部CT、頭部MRIが一般に用いられます。

そのほか、PET(ポジトロン断層法)は脳細胞の状態・働きを調べ、SPECT(シングルフォトン断層法)は脳血流を調べ、頭部CTや頭部MRIの検査では異常が認められない早期の診断が可能になります。

●どのような症状がみられるのか

いつとはなしに始まる記憶障害が初発症状であることがほとんどです。この記憶障害が徐々に進みます。これは加齢によるものとは別ものです。

症状の進行に伴い記憶力のみならず判断力の低下がみられ、今までできていたことが、できなくなったりします。さらに進むと買い物や金銭管理ができなくなります。

また、日時・場所に関する事柄や自分の前にいる人が自分とどのような関係にあるのかが分からなくなります。

さらに進むと日常生活でも着替え、入浴、トイレなどの手助

が極端に悪く、それ以外の部分は障害が軽く、脳の働きがある程度保たれています。金銭管理や計算などが障害されているのに、常識的な判断についてはあまり問題がないなど脳血管性認知症の特徴です。

●どのような症状がみられるのか

昔のことは覚えているが、現在のことを忘れてしまう。自分の居場所、時間、日時がはっきりしない、思い出せない。ものごとに興味を示さなくなる。興奮したり、突然泣き出したりする。夕方になると家に帰ると言いつて荷物をまとめたりする行為などがみられます。

●治療はどうするのか

脳梗塞の再発予防には、抗血小板薬、抗凝血薬を使います。脳出血の再発予防には血圧のコントロールがもっとも重要ですが、脳梗塞の場合、あまり血圧を下げすぎると再発率が増加することも知られています。認知症そのものを改善する薬はありません。うつ状態や意欲低下を改善させる薬を使用します。

●どこを注意すればよいのか

脳血管性認知症の原因となる脳血管障害を起こさないようにすることが重要です。それには、高血圧、脂質異常症、心疾患(脳そく栓の原因)や糖尿病などの危険因子をコントロールすることが大切です。

◆おわりに

以上述べたように、アルツハイマー型認知症と脳血管性認知症に対する理解と正しい知識をもつことが大切です。